

最後の日、私は、掃除機でなく、小さい箒で畳をはき、紙コップ等のごみを捨てた。事務所は、天神橋筋商店街の南森町駅に近い雑居ビルの2階にあった。

私が勤めていた会社は、平成11年3月14日に倒産。退職金の支払い等の精算は、組合が引き受け、逃亡した社長を探し出し、社員の前でお詫びをさせる集会まで開いた。幸い退職金の積立金は、手付かずのまま残っており、倒産後3か月位で退職金規定通りに全社員が満額を受け取ることができた。

組合が借りていた事務所  
の当番が必要になった。私は、

元執行部員。共働きで子どもがいなかった。他の組合員に比べて経済的に余裕があり、進んで当番を買って出た。

当時九州と北海道の国労は闘争中。倒産前は、ラーメンなどの物販を買う等の応援をしていた。今度は逆に遠路遙々応援に駆けつけてくれた。かえって恐縮した。

開設当初は、賑やかで、組合員・社員の憩いの場・情報交換の場であったが、時間の経過とともに来客者は少なくななり、多くの組合員の就職が決まっていた。いよいよ事務所を閉鎖する日が来た。

正確な日は定かではないが、  
11月末か12月の初め、半年以

上の月日が流れた。

私は、最後のご奉公として事務所を閉め、郵便受けに事務所の鍵を入れたとき、ああこれで終わりなんだなあと思った。少し淋しかった。やり終えた充実感よりも、どこかほっとした感触が残ったままになっていた。

今こうして考えると、あの日郵便受けに入れた鍵の感触が、もう後はないという気持ちに私を吹っ切らせ、人生の再出発の証として取り組んでいた社労士の受験勉強に猛進することができた。自分のことなのに時間が経たないと腑に落ちないことがあるものだ。